

令和 6 年度千葉市立緑町小学校

研究全体計画

- I 学校の概要
- II 研究の概要
 - 1 研究全体構想図
 - 2 研究主題
 - 3 研究の方法と重点
 - 4 研究の組織
 - 5 研究の日程
- III 各部会の研究
 - 1 生活科部研究概要
 - 2 理科部研究概要
- IV 今年度の成果と課題

I 学校の概要

千葉市立緑町小学校

所在地 千葉市稲毛区緑町2-13-1

TEL 043(242)2433 FAX 043(244)6909

校長 三橋 勉

学級数 21 学級 児童数 600 名 (R6 4/11 現在)

本校は、昭和 39 年 4 月に弥生小学校から分離、開校して 60 年の歴史がある。開校直後より、千葉市の研究指定校として公開研究会を行い、自主性・創造性・実践性を基盤とした教育理念を受け継ぎながら、数々の研究会を実施し、質の高い教育と素直で優秀な子どもを育てる実践が進められてきた。学区は、JR 線と国道 14 号線に挟まれ、京成線が中央を横断している。平成 24 年に校舎が新しく建て替えられ、翌年には創立 50 周年と共に校庭も新しく造りかえられた。新たな環境の中で、これまでの歴史を受け継ぎながら、更なる進化・発展を目指し教育活動に取り組んでいる。

特に理科教育においては、千葉市の理科教育センター校として中心的な役割を果たしてきた。日本初等理科教育研究会全国大会は 3 度会場校として公開研究会を行い、ソニー教育基金の受賞も数多くある。令和 5 年度は、開校から 23 回目となる公開研究会が行われた。また、「みどりっ子学習」として、夏休みの自由研究に全校で取り組んでおり、令和 5 年度には千葉県児童生徒教職員科学作品展において、学校賞を受賞した。



本校では、自らの夢の達成に向けて努力する姿こそ、自己実現に向かって伸びようとする子どもの姿であると捉え、確かな学力と豊かな心、たくましい体の育成を目指して教育活動を進めている。

千葉市の目指すべき子どもの姿

夢と思いやりの心を持ち、チャレンジする子ども

千葉市学校教育の目標

自ら考え、自ら学び、自ら行動できる力をはぐくむ

学校教育目標

夢と希望をもち、たくましく豊かに生きる子どもの育成
— 伸びよ みどりの子 —

〈自主的・主体的な活動〉

- ・体験的な学習の充実
- ・生活科、社会科見学、総合、宿泊体験
- ・みどりっ子学習 等

《考える子》

進んで学ぶ、自分で考え判断する、生活をよりよく改善する

《思いやりのある子》

仲良く助け合う、やさしく思いやりがある、心ゆたか

《たくましい子》

進んで体をきたえる、意欲をもって生活する、自分らしさを伸ばす

〈表現力・感性を豊かにする活動〉

- ・読書タイム
- ・読み聞かせ
- ・発見みどりカード、理科新聞
- ・読書の広場 短作文 等

〈ふれあい・思いやりを育む活動〉

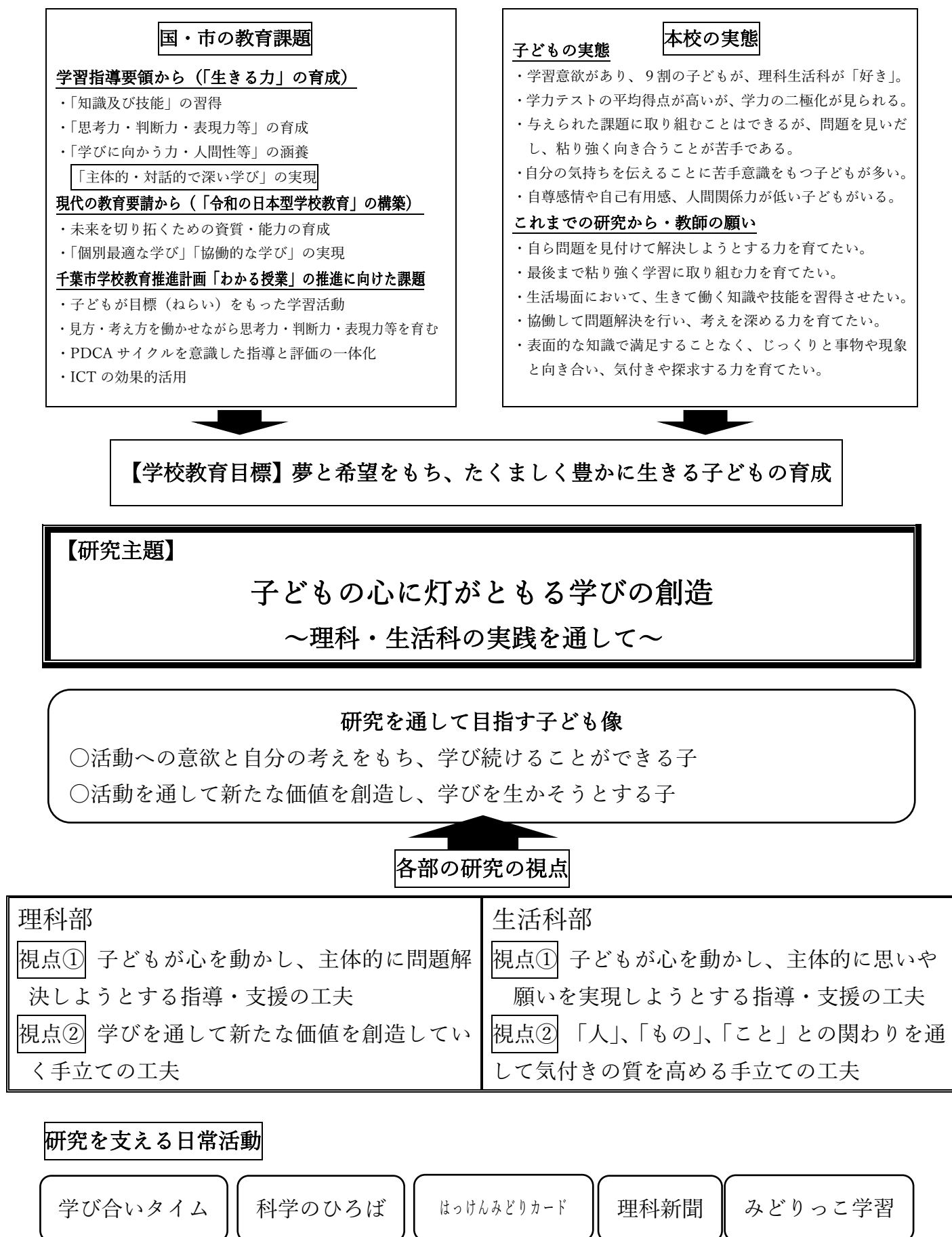
- ・たてわり活動
- ・全校遠足
- ・ボランティア活動
- ・挨拶運動
- ・清掃美化 等

〈保護者・地域と連携した活動〉

- ・読書ボランティア
- ・読み聞かせ
- ・ゲストティーチャー
- ・みどり小まつり
- ・おやじ組 等

Ⅱ 研究の概要

1 研究全体構想図



2 研究主題

子どもの心に灯がともる学びの創造 ～理科・生活科の実践を通して～

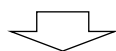
(1) 主題設定の理由

① 現代の教育課題から

現行学習指導要領では、「教育基本法や学校教育法などを踏まえ、これまでの学校教育のすばらしい実践やその蓄積を生かして、子ども達が未来社会を切り拓くための資質・能力を一層確実に育成することを旨とする。」ことを基本方針として示している。また、中央教育審議会答申においては、向かうべき学校教育の在り方を以下のように述べている。

○急激に変化する時代の中で育むべき資質能力

・「Society5.0 時代」「予測困難な時代」



新学習指導要領の着実な実施 ICT の活用

一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが必要

(中央教育審議会答申令和3年3月30日告示)

○今後5年間の教育政策の目標と基本施策

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的充実(令和の日本型学校教育)

(中央教育審議会答申令和5年3月8日告示)

これからの予測困難な時代に、学校教育に期待されていることは、個々の興味・関心・意欲等を踏まえて指導・支援することや、子どもが自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整することができるように促していくこと、そしてこれまで以上に子どもの成長やつまづき、悩み等の理解に努めていくことである。さらに、問題解決的な学習や体験活動等を通じ、子ども一人一人のよい点や可能性を生かすことで、異なる考えが組み合わさり、よりよい学びを生み出していく経験を積ませることである。

コンテンツ(内容)ベースの問題解決から、コンピテンシー(能力)ベースの問題解決へと教育の質的な転換が求められる現代において、教科等の固有の見方・考え方を働かせて自分の考えをつくり、対話や協働を通じて新しい解を生み出して問題解決をする子どもを目指す本研究は、現代社会の要請と合致し、意義深いものであると考える。

② 千葉市学校教育推進計画「わかる授業」の推進に向けた課題から

令和6年度千葉市学校教育の課題「21世紀を拓く」では、理科・生活科の課題を以下のように述べている。

理科の課題

○自然の事物・現象から問題を見だし、見通しをもって観察、実験を行い、ICTの効果的な活用や対話的な学びを通して、問題を科学的に解決する授業の工夫改善に努める。

○理科を学ぶことの意義や有用感を実感できるように、学んだことと自然事象や日常生活との関連を図ったり、振り返りを工夫したりすることによって、評価方法の工夫改善に努める。

生活科の課題

- 幼児期の教育との連続や他教科との関連、中学年以降の学習との接続を踏まえ、地域・学校の特色（人・もの・こととの関わり）を生かした教材や単元の工夫改善を図るよう努める。
- 思いや願いを実現する体験活動の充実を図り、伝え合う表現活動の場を設定することで、学びを振り返ったり互いの気づきを交流したりし、気づきの質を高める指導の工夫に努める。

千葉市学校教育推進計画では、「夢と思いやりの心を持ち、未来を拓く子ども」の育成を目指し、「自ら考え、自ら学び、自ら行動できる力をはぐくむ」ことを目標としている。理科や生活科においても、子どもが目標を持ち、各教科の見方・考え方を意識的に働かせ（生かし）ながら学習活動を行うような授業の工夫改善が求められている。本研究では、千葉市学校教育の課題を具体的な実践を通して解明できるものと考えている。

③ 学校教育目標から

本校の教育目標と目指す子ども像は以下の通りであり、「知」「徳」「体」をバランスよく鍛える子どもを目指している。「知」「徳」「体」を育むことは、本研究の目指す子どもの姿にも関連しており、本研究を進めることは、即ち、学校教育目標を具現化していくことと言えるだろう。

【学校教育目標】 夢と希望を持ち、たくましく豊かに生きる子どもの育成

目指す子ども像

考える子	思いやりのある子	たくましい子
・進んで学ぶ子 ・自分で考え、判断する子 ・生活をよりよく改善する子	・仲良く助け合う子 ・やさしく思いやりのある子 ・心豊かな子	・進んで体をきたえる子 ・意欲をもって生活する子 ・自分らしさを伸ばす子

④ 子どもの実態と研究経過から

本校の子どもは、学ぶことに大変意欲的で、理科や生活科の学習においても同様であり、学力が高い子どもが多い。令和5年度の全国学力・学習状況調査や千葉県標準学力考査の結果から、多くの子どもにおいて基礎的な知識・技能や思考力が身に付いていることがわかる。また、規範意識や自己有用感、生活習慣についての項目も概ね高い。一方、与えられた課題に対しては真面目に取り組むことができるが、自ら問題を見だし、主体的に粘り強く解決することを苦手としていたり、学習したことが生活や社会に生かされていることや自分自身の成長につながっていると実感できていなかったりする子どもも見られる。

本校の研究は、心を動かされるような体験が子どもの学びの大きな原動力となると考え、学習過程において知的好奇心の醸成や成就感・達成感を得られるような指導・支援の工夫について授業実践を重ねてきた。理科の学習では、単元構成を工夫したり、事物・現象とじっくり関わって問題を見出す場や実験・観察の時間を設定したりしたことで、子どもの主体的な学習態度が育まれてきている。生活科の学習においても、生き物の栽培・飼育やおもちゃ作り、学区探検等の計画的な体験活動を通して、子どもが目的意識をもって学び続ける姿が見られた。しかし、時代の大きな変化を前に当たり前のように掲げてきた問題解決の学習が本当に子ども主体の問題解決となっているのかを今一度問い直し、問題解決が形骸化していないか見直す必要がある。問題解決を進めていく過程を通して、生活や社会とのつながりを実感することで学ぶことの有用感を得たり、子ども自身が自らの成長に気付いたりするような授業を創り上げるために、これまで取り組んできた本校の取組を整理する。そして、

研究で重点をおいてきた子どもが解決したい「問い」や活動への「思いや願い」を大切にしていきながら、単元構成や教材の工夫だけでなく、学習形態の工夫や他教科・教育との連携等、カリキュラムマネジメントの視点を取り入れる必要がある。

これからの社会を担う子どもが学び続け、さらには学んだことを生かして未来を切り拓いていくことができるような学びの在り方について研究を通して解明していきたい。

以上の子どもの実態と研究経過を踏まえ、本校の子どもの課題を解決するために、研究主題を設定した。

(2) 研究主題について

① 「心に灯がともる」ことについて

本校では、以下の状態を「心に灯がともる」と考えている。

- ・問題の追究に向けた活動への意欲が高まっているとき
- ・学習で得たものを次の学習や生活に生かそうとするとき
- ・学習を通して気付いた自らの成長を実感したとき

こうした学習の様々な場面で子どもから表出される姿であると考え。子どもの「心に灯がともる」ことで、子どもの主体的な学習が実現し、目指す資質・能力が更に伸ばされていくだけでなく、心にともした灯で先を照らし、未来を切り拓いていく力が育成されると想定し、研究を通してそのような「心に灯がともる」学びを創り上げていくことを目的とする。そこで本校では、研究を通して目指す子ども像として以下のように設定する。

研究を通して目指す子ども像

- 活動への意欲と自分の考えをもち、学び続けることができる子
- 活動を通して新たな価値を創造し、学びを生かそうとする子

② 研究で大切にしていきたい「問題解決」について

学習中は一見、問題解決能力が高いと思われる子どもも、その力を実生活に生かす姿を見ることは多くない。委員会活動や学級活動、学校行事等で自ら問題を見だし、解決する姿を見るのは稀である。

しかし、社会の在り方そのものが劇的に変わってきている現代、子どもが自分自身で学校生活や将来を切り拓いていくために、問題解決する力を育んでいくことは重要な課題である。学習指導要領では、問題解決能力について以下のように述べている。

各教科等において、物事の中から問題を見だし、その問題を定義し解決の方向性を決定し、解決方法を探して計画を立て、結果を予測しながら実行し、振り返って次の問題発見解決につなげていく過程を重視した深い学びの実現を図ることを通じて、各教科などのそれぞれの分野における問題の発見解決に必要な力を身に付けられるようにする（以下省略）

子どもの問題解決する力を育むためには、問題解決する力を十分に養うことができる単元を通した学習過程の計画や授業改善が必要である。今一度、問題解決学習を問い直すことで子どもの思いや願いを叶える学習活動の在り方を模索し、充実を図ることで目指す子ども像に迫りたいと考えている。

なお、本校では、生活科の「子ども一人一人の思いや願いから学びを深める学習」を大きくは問題解決学習として捉え、研究を進めていくこととする。

3 研究の方法と重点

(1) 研究教科

- ・理科、生活科

(2) 研究期間

- ・令和6年度より3か年計画で研究を進める

(3) 研究授業及び授業者

①研究授業・授業者

- ・部会で1人ずつ、授業提案をする。
- ・講師招聘の提案授業を生活科から1本、理科から2本行う。
- ・指導案検討は、学年、部会、全体会の3段階構成で行う。
- ・協議会は全体で実施する。

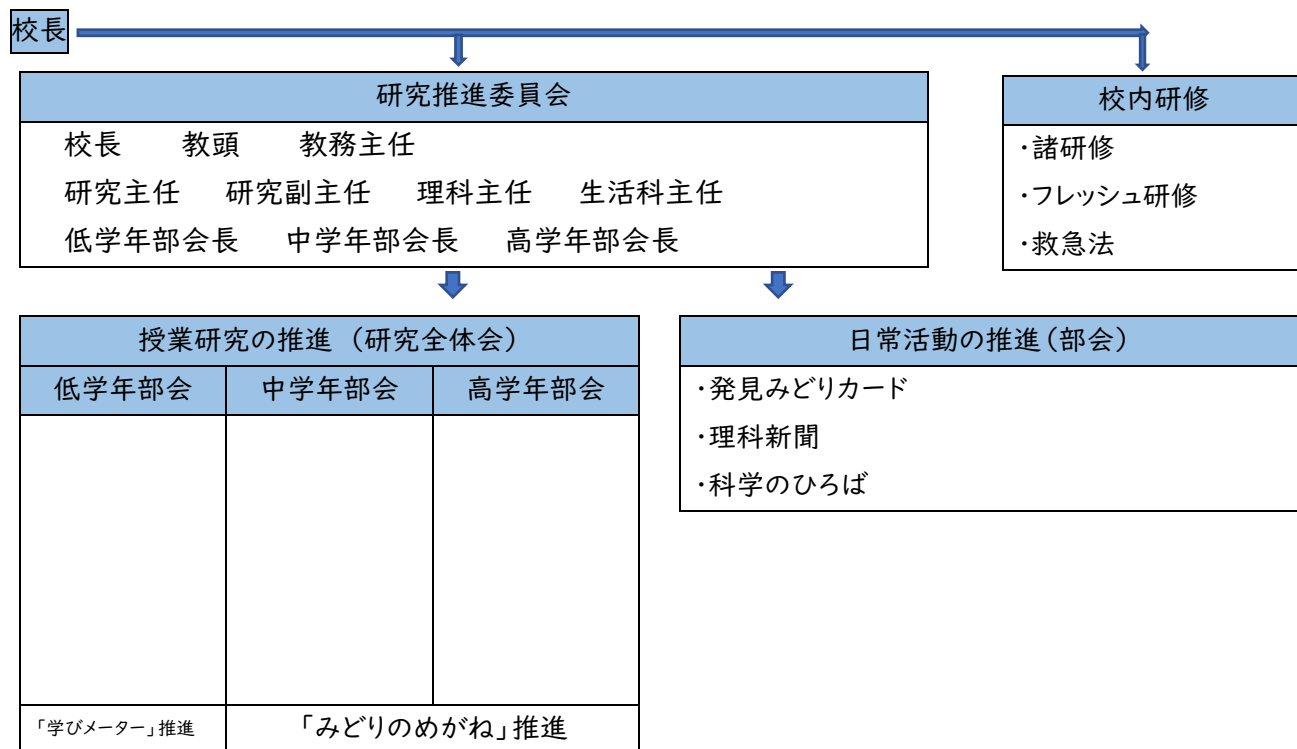
(4) 本年度の重点

◎研究の視点を基にした授業実践

◎指導と評価の一体化（理科の見方・考え方の具体的想定と価値付け、生活科の思いや願いを大切にする授業の工夫）

◎日常活動の推進

4 研究の組織



5 研究・研修年間計画

月	日	曜	形態	内容
4	3	水	研推	研究全体計画 理科部・生活科部研究計画 日常実践部会 提案
4	5	金	全体	第1回全体会 研究全体計画 理科部・生活科部研究計画 日常実践部会 提案
4	18	木	全体	保護者対応・コンプライアンス 研修（講師招聘）
4			研推	研究指定校打ち合わせ会
4	25	木	全体	第2回全体会 ※授業者 単元 展開場所 決定 指導案形式 提案 理科「見方・考え方」研修 生活科「気付きの質」研修
5	30	木	全体	理論研修「自由進度学習について」
6	6	木	全体	救命法
6	14	金	全体	研修「ギガタブの使い方やルールについて」
7	17	水	全体	理論研修「問題解決学習について」
8	21	水	全体	いじめ・特別支援研修
8	29	木	部会	指導案検討
10	3	木	全体	指導案検討（第1回研究授業）
10	24	木	全体	第1回研究授業 中学年部会 理科 「ものの温度と体積」
10	31	木	全体	指導案検討（第2回研究授業）
11	14	木	全体	第2回研究授業 低学年部会 生活科「きせつとなかよし ふゆ」
11	25	月	全体	指導案検討（第2回研究授業）
12	12	木	全体	第3回研究授業 高学年部会 理科 「水溶液の性質」
12	19	木	全体	研究紀要書式確認
1	12	水	個人	保護者対応研修（動画視聴）
1	23	木	部会	研究紀要執筆・内容確認
1	30	木	全体	次年度の研究に向けたアンケート記入
2	中		研推	次年度の研究について
3	中			第5回全体会 研究のまとめ

Ⅲ 各部会の研究

1 生活科部会研究計画

(1) 研究主題・副題から

子どもの心に灯がともる学びの創造

～理科・生活科の実践を通して～

生活科における「心に灯がともる学び」とは、具体的な活動や体験を通して、子どもが思いや願いをもち、自ら進んで学んでいくことである。「思い」とは、子どもが対象と向き合ったときに、「たのしい」「うれしいな」「ふしぎだな」など感じる様々な感情のことである。「願い」とは、対象と向き合い「思い」を抱いたときに、「やってみたい」「もっとしりたい」「つたえたい」と願うことである。身近な人々、社会及び自然と関わりながら、よりよい生活に向けて思いや願いを実現しようとするのが重要である。

そのために、子どもに学習活動への意欲を継続的にもたせる工夫や、自らの成長を実感することのできる活動の展開をしていく必要がある。思いや願いの実現に向けて、心に灯をともしながら活動に取り組む姿を意識した生活科の学習を目指していきたい。

(2) 生活科で目指す子どもの姿

- 思いや願いをもち、その実現に向けて身の回りの対象と進んで関わり合うことができる子
- 「人」「もの」「こと」との関わりを通して学び、気づきの質を高めることができる子

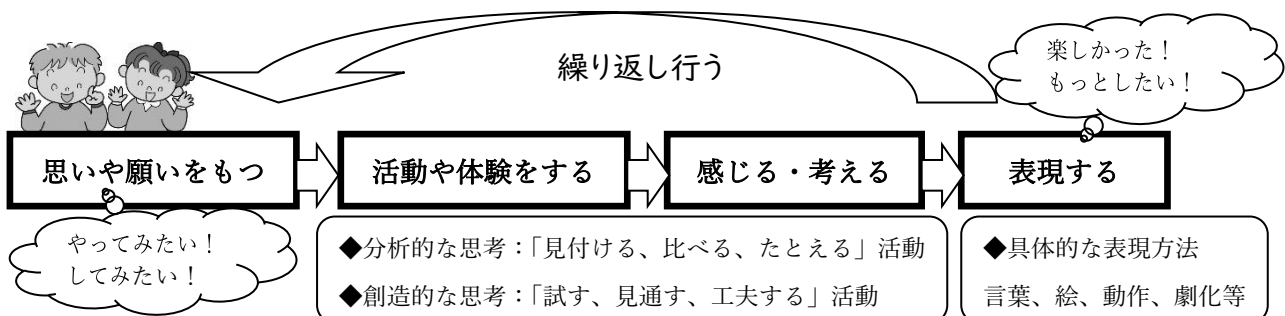
(3) 研究の視点

視点1 子どもの心を動かし、主体的に思いや願いを実現しようとする指導・支援の工夫

生活科において「子どもの心が動く」とは、子どもが対象に向けて「やってみたい」「してみたい」と自分の思いや願いをもつことである。その思いや願いの実現に向けた「主体的に問題解決する」姿を目指し、活動の工夫をしていくことが大切である。

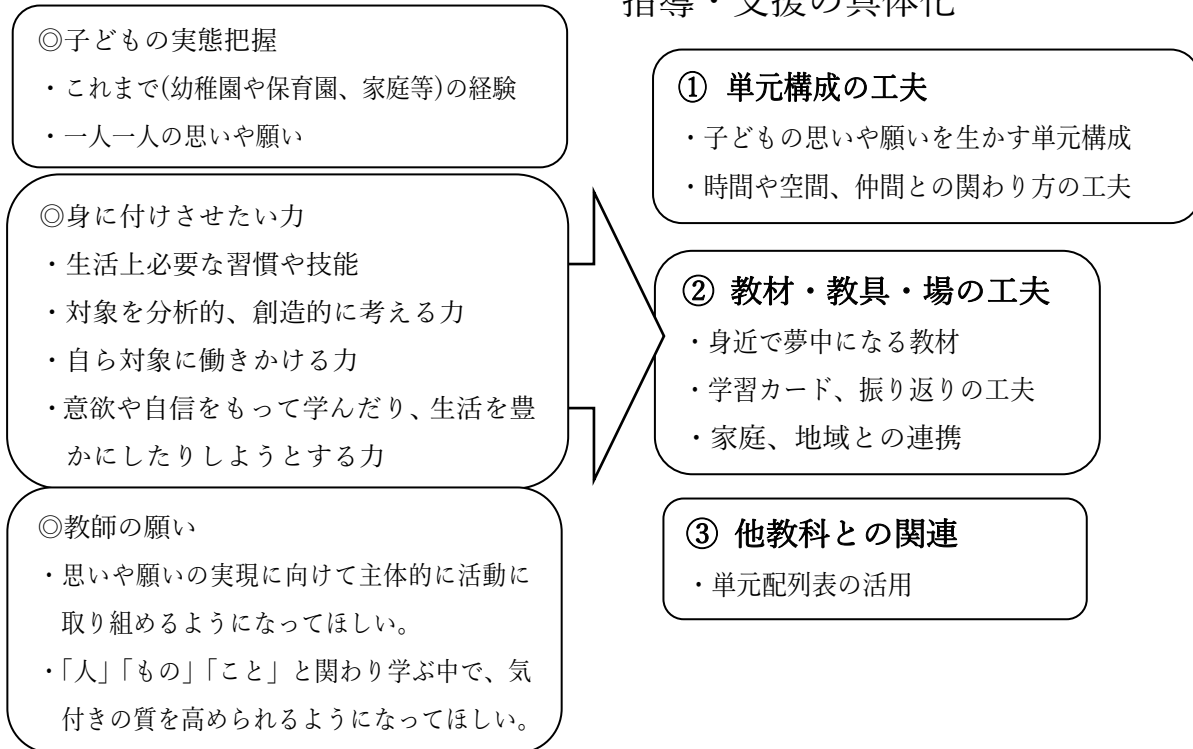
そのためには、教師が子どもの思いや願いに沿った学習の計画を立てたり、学習を振り返ったりする場面を意図的に設定していく必要がある。思いや願いを実現する過程において、子どもは様々なことに気付くと同時に、活動の楽しさを味わうだろう。ここで生まれた満足感、成就感などの手応えを感じることが、次の学習への主体的な態度へと繋がると考える。

〈主体的に問題解決しようとするための学習過程〉



子どもの心を動かす具体的な場面として、子どもの興味や関心のある「魅力的な教材」や「地域人材を生かした学習」など、導入場面の工夫が考えられる。また、対象とのふれ合いを行う体験活動や、学習を振り返る表現活動を繰り返し取り入れ、友達と学び合う中で、自分の成長に気付くことができると考える。自分の思いや願いを叶えていくことで、自分に自信をもち、自らの学びを次の活動やこれからの生活に生かしたり、新たなことに挑戦したりしようとする主体的な姿を生み出していく。そのための指導・支援の具体的な方法については、以下の通りである。

指導・支援の具体化



視点2 「人」「もの」「こと」との関わりを通して気づきの質を高める手立ての工夫

生活科では、子どもが「対象への気づき」から「自分自身への気づき」へと気づきの質を高めることを大切にしている。小学校低学年における自分自身への気づきは大きく以下の3点が重視されている。

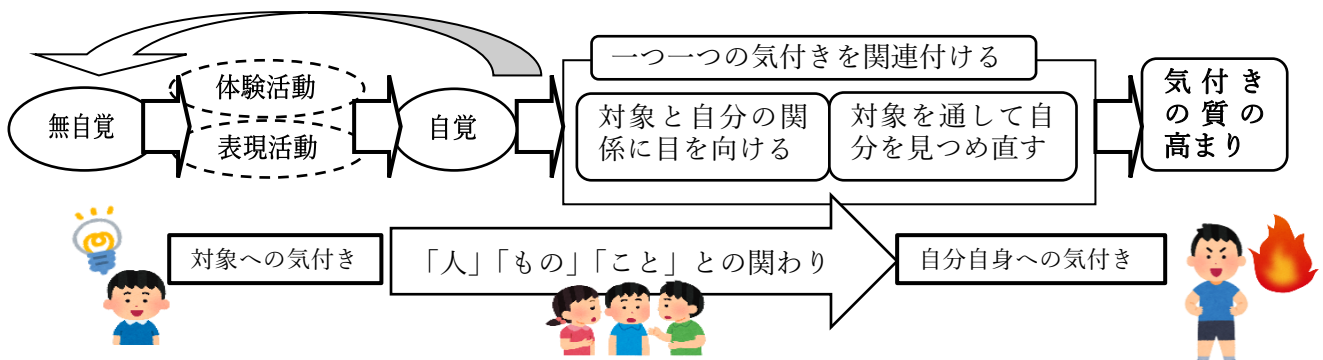
- ・集団における自分の存在に気付くこと
- ・自分のよさや得意としていることに気付くこと
- ・自分自身の成長に気付くこと

そして、気づきの質を高めるということは、

- ・無自覚だった気づきが自覚されること
- ・一人一人に生まれた個別の気づきが関連付けられること
- ・対象のみならず自分自身についての気づきが生まれること

が考えられる。

〈学習全体の流れ〉



子どもが気づきの質を高めるためには、まず、対象に対する気づきを生むための子ども一人一人の主体的な学習が大切である(視点1)。子どもの「知りたい」「伝えたい」という思いを育んだ上で、具体的な活動や体験を行う中での身近な「人」「もの」「こと」と適切に関わる場面を設定し、自分の気づきについて交流する手立てを講じていくことが必要であると考えます。

2 理科部会研究計画

(1) 研究主題・副題から

子どもの心に灯がともる学びの創造 ～理科・生活科の実践を通して～

理科における「子どもの心に灯がともる学びの創造」とは、自然の事物・現象に対して子どもが興味・関心を持ち、「調べたい」と感じるところから始まる。そして、自ら見いだした問題を予想や仮説を立てて観察・実験を行い、解決していく中で、新たな問題を見いだしたり、習得した知識・技能を生活に生かしたりして繰り返し自然の事物・現象に関わっていくことが重要である。そのために、導入や単元構成、教材教具を工夫し、学習活動への意欲を継続的にもたせ主体的に学ぶことができる環境づくりが必要になる。また、理科を学ぶことによって生まれる自己の成長や理科を学ぶ有用感を感じられる活動を展開していくことも重要である。

学習と指導の調和を意識し、効果的に学習を進めることで、子どもの心に灯がともり続ける理科学習を展開していきたい。

主体的な問題解決

- ・思考に沿った単元構成の工夫
- ・見方、考え方を働かせた授業



学びを通して気付く新たな価値

- ・知識の活用（発展学習）
- ・実生活や社会とのつながり
- ・自己の成長に気付く振り返り

(2) 理科で目指す子どもの姿

- 自ら見いだした問題に粘り強く向き合い、自然に親しむことができる子
- 活動を通して学ぶことの意義や自らの成長に気づき、学びを生かす子

(3) 研究の視点

視点1 子どもが心を動かし、主体的に問題解決しようとする指導・支援の工夫

理科において「子どもが心を動かす」場面とは、

- ・これまでに経験したことのないような不思議な現象や調べ続けたいと思う現象に出合ったとき
- ・疑問を解決するために自らが立てた予想や仮説、解決の方法の妥当性を検討した際に、自分の考えと観察や実験の結果との一致、不一致が明確になるとき
- ・問題を解決したときの充実感や次の問題解決への意欲をもったとき

そこで、子どもの心を動かし、主体的な問題解決をすることを実現させるためには、子どもの興味・関心を引き起こす事象の提示し、見いだした問題を追究し続ける意欲を喚起する単元構成の工夫、自らの問題を解決するために各々が追究できる場づくりが必要であると考えます。

心を動かされるような体験が子どもの学びの大きな原動力となり、子どもの心に灯をともしることにつながると考える。そこで、学習過程において知的好奇心の高まりや成就感・達成感を得られるような支援・指導の工夫をしていく。以下の手立てを講じて繰り返し自然の事物・現象に関わることによって、主体的に問題解決を行い、問題を解決することに喜びを感じさせていきたい。

① 学び続ける意欲を喚起する単元構成の工夫

単元の導入では、自然の不思議さに気付き、子ども自らが問題を見いだし、単元の学習を通してその問題を追究していくことができるような事象・現象との出会いの場を設定する。ここでは、子ども自らが問題を見いだすことができるように、これまでの単元の学習で働かせてきた理科の見方・考え方、習得した知識、育成した思考力等と関連付けたり、子どもの実態を把握した上で生活経験と結びつけたりした事象・現象を効果的に提示していく。問題を見いだす導入時を工夫することで、子どもが「調べたい」「もっと知りたい」という思いをもつことにつながると考える。

問題解決を繰り返していく中で、子どもは新たな問題を見いだしていく。子どもが追究する意欲をもち続けながら学習を進めていくことができるように、子どもの思考の流れを意識した単元構成をしていく。

また、各々が興味のある問題に取り組む機会を提供することが有効な単元において、子どもの興味・関心等に応じて、自由進度学習を取り入れる。自身の学習が最適となるよう調整し、主体的な学習につながると考える。

② 教材・教具の工夫

子どもの思考を重視した学習を進めるにあたって、よりわかりやすい教材教具を提示したり、特定の単元に合った教材を工夫したりすることが重要である。問題を見いだす場面や観察や実験を通して検証する場面など、様々な場面でより安全でわかりやすい教材を工夫する。そうすることで、子どもの知的な好奇心を高め、追究活動を活性化させることにつながると考える。

視点2 学びを通して、新たな価値を創造していく手立ての工夫

理科において「新たな価値を創造する」とは、子どもが理科学習を通して

- ・学習内容と日常の事物・現象との関連に気付き、学んだことを活用しようとする（発展的な学習、ものづくり、他教科との関連、環境問題との関連など）
- ・妥当な考えを導き出すために、様々な他者の考えに触れ、協働のよさに気付くこと
- ・自己調整学習を通じて、自らの成長（価値）に気付くこと

などが考えられる。そのために、学習過程において、習得した知識を活用したり、生活や社会との結びつきを意識したりすることができる場面や、他者との関わりを通して自らの考えを広げる場面を設定する必要がある。また、学びを通して自己調整を行い、自分自身の成長に気付くことが重要である。以下の手立てをとって、子どもが理科学習を通して、新たな価値を気付く力を養っていききたい。

① 習得した知識・技能を活用する場面の設定

学習を通して習得した知識や技能を活用して、有効に働かせることは、子どもが新たな価値に気付くことにつながると考える。そこで、学習内容と関連した発展的な課題を提示したり、単元末に子どもがもっと調べたいと考えた問題を解決する時間を設けたりし、習得した知識・技能を活用する場面を設定する。知識を活用し、発展的な学習を取り入れることで、より深い学びにつながると考える。

② 学習内容と生活・社会との結びつきを実感するための手立ての工夫

理科で学んだことと生活・社会との結びつきを子どもが実感することができれば、理科を学ぶ有用感を持ち、新たな価値に気付くことにつながるのではないかと考える。そこで、他教科や領域との教科横断的

な学習を取り入れる。理科での学びを他教科などの学びで活用したり関連付けたりすることで、学びが深まる。また、単元の終末に学習内容を生かしたものづくりを行ったり、学習成果の発表を行ったり、SDG s などの国際的な持続可能な社会に向けての取組や社会的な課題との関連を意識した場面を設定したりする。単元の内容によって有効な手立ては異なるが、自然や日常生活など他の場面に適用して考えることで、理科の学習が日常生活や社会と深く関わりをもっていることに気付けるようにする。

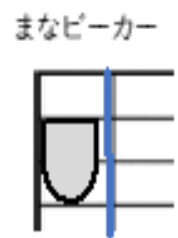
③ 他者との関わりを通して考えを深める場面の設定

知識や考えの交流は、新たな発想を生み出したり、自分の考えを深めたりすることにとっても有効となる。互いの考えがよく見えるように外化して、話し合いをし、概念の形成を図る学習方法を取り入れることが、学習者にとって個々の事例から導き出す概念を修正して、概念的知識の一般化を図る有効な方法となるのではないかと考えた。他者との関わりを通して、自分だけでは気付くことができなかった知識を得ることができ、それが新たな価値につながるのではないか。そこで、グループ構成を工夫したり、ICT を活用したりして共有の仕方を工夫する。また、単元によっては表やグラフなどを効果的に活用し、学級全体で得られた実験結果から妥当性を検証することで、学級全体の問題解決に結び付け、主体的な問題解決へもつなげていきたい。

～日常的な実践～

☆子どもが自らの成長を感じ取るための振り返りの工夫

学習状況を把握し、自己の変容や成長を自覚することができるようにするために、「まなビーカー」や「理科日記」での振り返りを行う。「まなビーカー」は学習の最後に、学習の達成度をノートにビーカー型の図に表すことによって自身の学習状況を振り返る。この振り返りでは、学習を通して考えたことや気付いたこと、理解したことなどを書き、子どもが自らの学習状況について把握できるように促す。その際に学習の充実感や達成感への気付きを通して、自己の変容や成長を実感させていきたい。また、学習を通して感じた疑問やもっと調べたいことも記し、共有することで子どもが主体的に学習に取り組む態度を育てたい。学習内容によって、取り入れる自由進度学習においても、振り返りをより意識することで、自己調整を行い、自分自身の成長に気付くことができ、自らの成長に気付くきっかけとなるのではないかと考える。

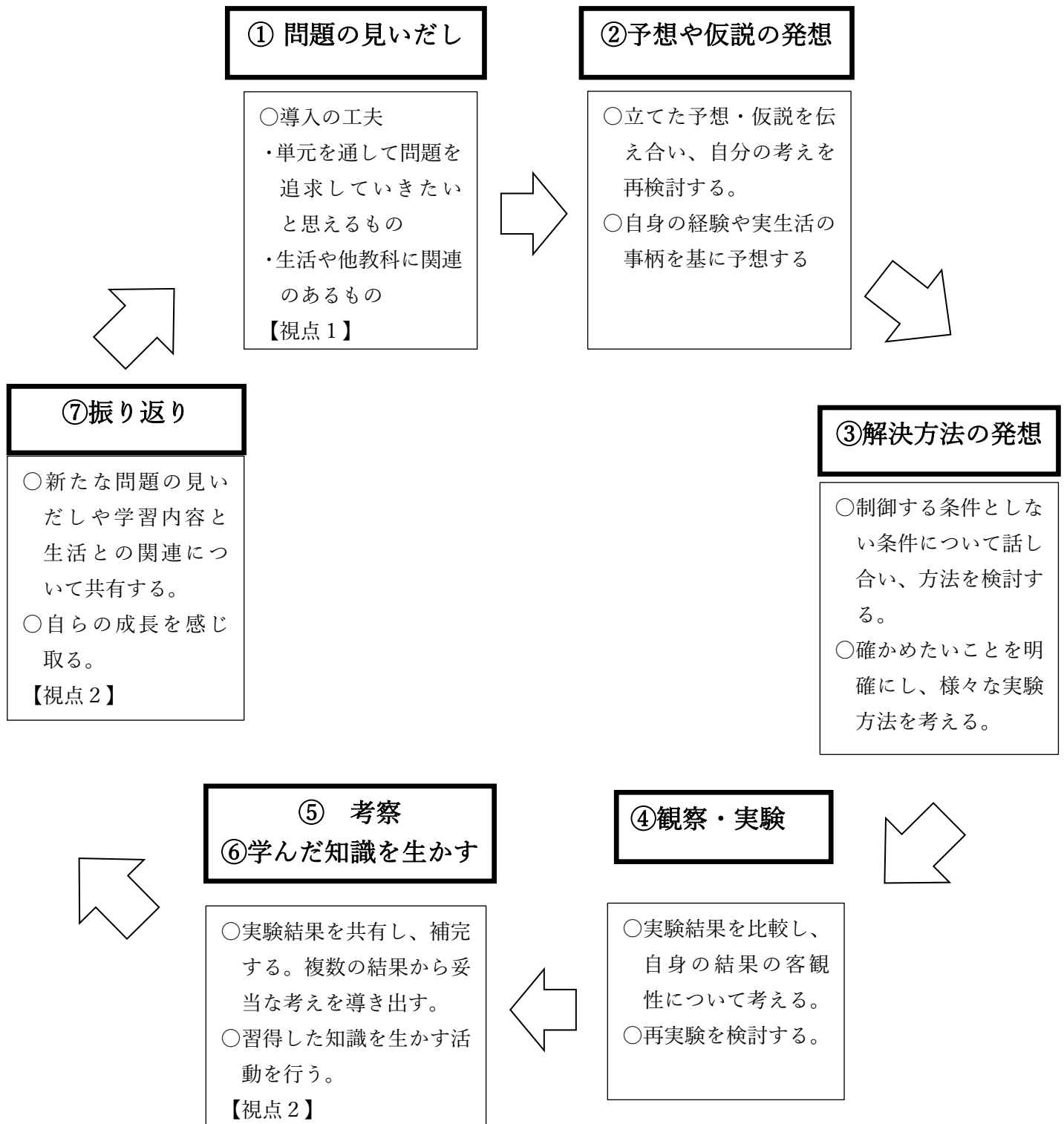


☆子どもが理科の見方・考え方を意識的に働かせる授業づくり

習得・活用・探究という学びの過程の中で、「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、思いや考えを基に創造したりすることが深い学びにつながると学習指導要領に記されている。

そのためには、予想や考察などの場面で「理科の見方・考え方」を意識的に働かせ、自然の事物・現象に関わっていくことが重要だと考える。そこで、子どもが「理科の見方・考え方」を働かせたときに「みどりのめがね」を使って称賛し、意識的に「理科の見方・考え方」を働かせられるようにする。子どもが「理科の見方・考え方」を自在に働かせ、自然の事物・現象を様々な視点で捉え、問題を見だし、その問題を解決するためにどのような考え方で思考していくか、解決の見通しをもつことで、子どもが主体的に学び続ける活動へとつながっていくと考える。

☆大切にしていきたい問題解決の流れ



IV 今年度の成果と課題

1 研究の成果と課題

- 子どもの思いや願い・思考に沿った単元構成の立案や教材の開発を行ったことで、主体的に学習に取り組む姿が見られ、資質・能力の育成につなげることができた。
- 学びを深める場面や学習した知識を活用する場面を設定したことで、子どもたちが学ぶことの意義を実感することができた。
- 子どもが学習の過程を振り返り、学びを調整し続ける機会を設けることで、自らの成長や学ぶことの価値に気付けるようにする必要がある。
- 教科横断的な授業を行う機会を増やすことで、より主体的な学習を促し、生きた学びにつなげていきたい。

2 生活科部の成果と課題

- 子どもの思いや願いを大切にしながら、対象に繰り返し関わるができる単元構成を工夫したことで、子どもの心が動き、主体的に対象と関わろうとする姿が見られた。
- 個々の気付きを伝え合う時間や、気付きを可視化する場を設けたことで、気付きが共有され、関連付けられることにつながり、気付きの質を高めることができた。
- 単元のはじめに抱いた思いや願いを想起させる場やワークシートの工夫をして、単元全体の見通しをもって対象と関わるができるようにしていく必要がある。
- 気付きの共有をする際には、教師の役割が大変重要となってくる。子どもの気付きを共有して、関連付けていく方法について、生活科部全体で検討し、よりよい在り方を考えていく必要がある。

3 理科部の成果と課題

- 導入時に単元を貫く課題を設定したり、学習に合った教材教具を工夫したりして子どもの思考の流れに沿った単元構成を取り入れることで、子どもが「なぜだろう」「もっと調べたい」という思いをもち、主体的に学習に取り組む姿が見られた。
- 単元の後半に学習内容と関連した発展的な課題を提示し、習得した知識・技能を活用し、発展的な学習を取り入れたことで、より深い学びにつながった。
- グループの友達と話し合いながら協力して問題解決を行ったり、フローチャートを活用して一人一人が検証実験を行ったりと様々な学習形態を取り入れた。子どもの実態と学習内容に合った主体的な学習につながった。
- 今年度から視点として新たに掲げた「理科における新たな価値の創造」について内容をより精査し、校内の職員で共有する必要がある。
- 写真や動画を撮ることは、結果を記録でき、後で見返せるよさがあるが、写真を撮ることに一生懸命になってしまって、思考の妨げになることもある。目的意識のあるギガタブの効果的な使い方を今後もし引き続き追究する必要がある。
- 子どもに見方・考え方を意識的に働かせることが十分にできなかった。子どもが見方・考え方を働かせた際に、称賛し価値づけることで意識的に働かせられるようにする必要がある。